



Vol.68

机の上の小さな変革



残す と 残る

こんにちは、菅俊一です。今回は、アーカイブということについて考えていきたいと思います。

早速ですが、みなさんの自宅にある、制作されてからの年数が最も古い本もしくは印刷物を探してみてください。所有してからの年数ではなく、つくられてからの年数でみてください。いかがですか？ 私は1957年に発売された、工学分野の研究書が見つかりました。もしかしたらもっと古いものもあるかもしれません。

それでは、今度はみなさんの持っているPCやスマートフォンのなか、もしくは何らかのメディアに保存されていたりするデータのなかで最も古い、自分が作成したファイルを探してみてください。いかがでしょうか。私は2000年につくった、電子音で構成された曲のオーディオファイルが見つかりました。

さて、最初に探してもらった書籍や印刷物ですが、私の場合は60年以上前に出版された、自分が生まれる遙か前のものが見つかりました。当然、出版当時から所有していたわけではなく、以前古書店で購入した結果、自分の手元に存在しているものです。特に意識して「長く取っておこう」と思わなくとも、うっかり60年以上残ってしまっていることに驚きを覚えます。きっとこの先も自宅の本棚に残り続けていくので、100年以上残っていくことも可能なのではないかと考えています。

一方、データはどうでしょうか。オーディオファイル

はまだいまのPCで再生することは可能ですが、データ自体はPCのなかにはなく、かなり前にDVD-Rに保存していたものです。しかし、その中身を確認するために必要なドライブがいまのPCには搭載されていないので、どうにか倉庫から外付けのドライブを探すことで、何とか確認することが可能になりました。

“いつの間にか”がもたらす発見

先ほどの本とは異なり、データの場合も20年以上残ってはいるものの、外部のメディアに保存するなど意図的に頑張っただけの結果、いまでもアクセスができるようになっています。

しかし、DVDドライブなど過去のメディアを確認するための道具自体が希少なものになっていたり、ソフトウェアのバージョンが上がって昔のファイルが開けなくなっているなど、残すこと自体や残したものを確認することに高いハードルがある状況になっています。

いまは世の中の動きとして、いかにペーパーレスにしていかに注力していますが、紙の本ならではの「いつの間にか」だいたい長い時間残ってしまっているという性質に着目すると、残そうと思っていなくても残ってしまうものには、機能や利便性とは無縁な豊かさや、意外なおもしろさが発見できるかもしれません。 ▲

PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、さまざまなメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』『ルール？本』など。